

## 古プロシア語ENCHIRIDIONの翻訳言語について

著者	井上 幸和
雑誌名	神戸外大論叢
巻	47
号	5
ページ	19-36
発行年	1996-10-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001605/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001605/</a>

# 古プロシア語 ENCHIRIDION の翻訳言語について<sup>\*</sup>

井上幸和

## 序 論

プロシア語の言語資料のひとつ、第3カテキズム（あるいはエンキリディオン、1561年出版）が持つ意義は、プロシア語学およびバルト語学にとっただけでなく、印欧語学全体にとっても、過大に評価し過ぎるということはない。しかしながら、この言語資料がオリジナルではなく、M. ルターによる『小カテキズム』（1543年刊）の翻訳であり、加えて翻訳の過程もしくは最終的校正の段階で余儀なく生じるに至った少なからざる翻訳上の欠陥を内包す

---

本稿は、1996年10月4、5日、クラクフ（ポーランド）郊外モギラニにて開催された第2回プロシア語学会 Colloquium Pruthenicum Secundum での口頭発表の際に、発表要旨とともに予め配布した論文 “К вопросу о языке перевода прусского Энхиридиона” の日本語訳である。この論文をあえて翻訳してここに掲載する理由は2つある。同学会の会議録に掲載予定の論文は、定められた紙数制限のために解説的記述にあたる第1章の部分を極力削除して論点の中心である第2章を前面に出すものになる。そこで、最も狭い範囲でのプロシア語専門家に向けてはそれでも趣旨が理解されるものになるが、少し広い範囲の読者に対してはむしろ本稿のほうが理解の助けになると考える。これが第一の理由である。さらに、本稿において、筆者はプロシア語エンキリディオン研究の基本的な姿勢を表明しており、口頭発表の趣旨自体はこの基本的姿勢と区別して独立のものとして理解されてよいのであるが、一方で、本稿は本稿として基本的姿勢の表明とあわせて公表しておくことに意味があると思う。これが第二の理由である。あえて日本語訳をしていく理由も、同じ理由の延長上にある。なお、口頭発表の際に、あるいはその後の雑談において、筆者の発表趣旨に対して好意的なコメントをいただいた諸氏には、この日本語訳を公表する機会を利用して、感謝の意を表明しておきたい。とりわけ、ラトヴィアのヴァナグス教授には、筆者未見のラトヴィア語訳ルターカテキズム（エンキリディオン）のファクシミリ出版（1924年刊）のコピーを、学会後、直ちに送っていただき、本稿（注11）に言及することができた。同氏のみならず、常に好意的な各国のプロシア語研究者、バルト語研究者の助言や援助のおかげで筆者のプロシア語研究がなんとか成り立っていることを、あらためて痛感する次第である。（1996年11月記）

るものであるという理由で、多くのプロシア語研究者は、今日に至るまで、エンキリディオンのテキストが言語学的分析に耐えられない言語資料であるとみなす傾向が認められることも事実である。その翻訳テクニックを批判する言及として、例えば、次の J. エンゼリンの明言がよく知られている：「古プロシア語のテキストは大部分、奴隸的 sklavisch かつ逐語的 Wort für Wort に翻訳されたものであるので、統語論にとってはほとんど何も生み出さない」(Endzelin, 1944, 137)。

筆者もまた、現代の言語学の観点からは、エンキリディオンの翻訳テキストの状況は大きい批判を受けて当然であることを認める。しかしここであえて次のような根本的な問題を提起してみたい：われわれは果たして、翻訳の言語事実に対する伝統的な批判を全面的に支持すべきであろうか。エンキリディオンの翻訳者がいかなる目的（あるいは、いかなる意図）をもって翻訳作業を行ったか、どの程度の翻訳の完成度をもって翻訳者はよしとしたか、あるいは少なくとも、翻訳作業の制約の範囲内で彼はいかなる妥協を余儀なくされていたか、といった問題をもう一度考えてみることに意味はないであろうか。

本稿では、テキスト全体の外的構成の解釈、ならびにテキスト中に意識的にせよ無意識的にせよ翻訳者の意図が表出していると思われる一連の箇所の指摘と解釈に基づいて、翻訳テキストとしてのエンキリディオンに新たな観点を提示してみたい。

あらかじめ、翻訳遂行のプロセス、当時のプロシア語の状況、すなわち翻訳作業の背景としての言語状況、について最小限の情報の確認をしておく。<sup>1)</sup>

プロシア語エンキリディオンは、ドイツ人宣教師 A. ヴィルが P. メゴットなる者の協力を得てドイツ語から翻訳したものである。P. メゴットは A.

---

1) 翻訳作業のプロセスについてのなにがしかの情報は、A. ヴィルと P. メゴットの書簡中にかがうことができる。Maziulis, 1981, 241-249を参照。ただし、ここではその内容を検討することはしない。

ヴィルよりもプロシア語の知識に関しては豊かであった。<sup>2)</sup> この意味で、エンキリディオンの翻訳はA. ヴィルとP. メゴットの「共同作業」であったが、翻訳に対する批判は、その銚先がいずれの側面に向けられるかによって、あるいは両者に帰せられるべきものであるか、あるいはいずれか一方に帰せられるべきものであるかが異なってくる。したがってあらかじめ、翻訳作業における両者の役割分担を想定しておくことが適当である。概して言えば、翻訳作業の技術的・実践的側面はP. メゴットに帰せられ、翻訳のストラテジーとその一貫性の決定、すなわち翻訳の仕上げは、A. ヴィルに帰せられると言えよう。そして本稿ではP. メゴットではなく主としてA. ヴィルがその責務を負うところの翻訳の側面を問題にすることになる。

いずれにしても、エンキリディオンの翻訳は両「翻訳者」の最大の努力によって、当時プロシア語話者がルター・カテキズムの内容を理解し易くすべくなされた所産であった。

おそらくは、エンキリディオンの翻訳言語は、P. メゴットが有していた当時のプロシア語の知識の所産である。しかし同時に想像されることは、当時、プロシア人にルター・カテキズムのような文化的・宗教的内容のテキストに耐えるだけの言語的土壌がいまだ存在しなかった、あるいはすでに存在しなかったのではないか、ということである。あわせて、両「翻訳者」には、おそらく、ドイツ語からプロシア語への意識（弾力的翻訳）を遂行するほどのプロシア語の知識もなかったものと思われる。

翻訳作業のプロセスにおいて「主導権」はA. ヴィルにあったと考える限りにおいて、ヴィル本人が翻訳の方針を決定し、翻訳テキストの妥当な「体裁」を選択したと考えられる。すなわち、個々の単語、語形式、統語論的単位をP. メゴットが（おそらく、口頭で）翻訳するのを記録しながら、A. ヴィルは、翻訳テキストの「規範」と「体裁」とをあわせて決定しようとし

---

2) 実際問題として、A. ヴィルはほとんどプロシア語を知らなかったようである。Schmalstieg, 1974, 7を参照。

た。その結果、彼が提出したのが、今に伝わるルター・カテキズムの「翻訳」である。<sup>3)</sup>

本稿の課題は、したがって、次のように要約することができよう：A. ヴィルが翻訳作業のプロセスにおいて意図した「規範」はいかなるものであったか。現在われわれが手にする（ファクシミリ版および校訂版によって見ることができる）翻訳テキストの全般的、具体的特徴に基づいて、それをどのようにに推定することができるか、これが課題である。

1. 翻訳上の特徴は、ドイツ語オリジナルからプロシア語へのいわゆる「逐語訳」という一般的なテクニックに最も顕著に現れている。このことは自明の事実である。さらに、エンキリディオンの翻訳は、単に「逐語訳」というだけでなく、「奴隸的模倣」であるとも言われる。（前述の J. エンゼリンの言にある 'sklavisch' を参照。）「奴隸的逐語訳」、これこそがプロシア語テキスト全体、とりわけエンキリディオンの翻訳テキストに対する全般的評価である。しかしながら、こうした評価が正当であるのは一面においてのみである、というのが筆者の考えである。この点について議論をすすめる前に、「逐語訳」という用語の意味するところを考えておく。

「逐語訳」が直接に意味するところは明らかに、「(単語を) 1対1で翻訳すること、word for word, Wort für Wort」である。本論の対象言語で言うと、ドイツ語の単語をひとつずつプロシア語の単語に翻訳することである。通常この用語は「下手な翻訳、洗練されていない翻訳」について用いられる。エンキリディオンの翻訳テキストはまずもって、直接的な意味での

---

3) このことに関連して、筆者は、プロシア語エンキリディオン研究のための適切なアプローチのひとつは、翻訳者の「意図」を考慮した上でのテキストの修正、すなわち、A. ヴィルが翻訳テキストの作成をするときに意図した「規範」を考慮した修正であると考えている。筆者はそのような修正をテキストの「標準化 нормализация」と呼んでいる。「標準化」の目的は、翻訳作業のプロセスもしくは校訂の段階でさまざまに生じた誤謬や不一致を、推測される翻訳者の「意図」の範囲内で、テキスト全体として均一化することである。この点についてはさらに、Иноуз, 1982, 15 - 16 をも参照のこと。

「逐語訳」, すなわち, 「(単語を) 1対1で翻訳」したものである。テキスト中の任意の例がこれに該当する<sup>4)</sup> :

(D = ドイツ語原文, F = プロシア語訳)

D 34,8 Wir sollen GOTT den HERREN vber 9 alle  
 || || || || || | ||

F 35,9 Mes turrimai Deiwan stan Rikijan kirscha 10 wissan

ding foerchten vnnd lieben / das wir vmb seinen

|| || | || | || |  
 powijstin biätwei bhe milijt / kai mes — tenneison  
 gen

10 willen / vnserm nechsten nicht mit list / nach  
 || | | | | |

11 paggan / noūsmu tawischan / ni sen wīngriskan 12 no  
 inst=acc?

seinem 11 Erbe / oder Hause trachten / vnd nicht mit

| | | | || | |  
 tennēison weldiisnan adder buttan stallēmai bhe 13 — sen  
 gen acc acc conj=ind

— schein des 12 Rechtens an uns bringen /  
 | || | | || ||

ainesmu swāigstan stēisei tickrōmiskan ēn - mans 14 pīdimai /  
 inst=acc acc

Sondern jhm dasselbig 13 zu behalten foerderlich

| || || | || |  
 Schlāits stesmu stansubban prei polaikūt 15 brewingi

4) 以下, 記号|は, オリジナルと翻訳の両テキストが語順に関して一致していることを示し, 記号×は, 翻訳において語順の転換があることを示す。さらに, 記号||は, 語順と文法形式の両方が一致していることを示す。(例示のための材料はすべて, Maziulis, 1981 にもとづいて作成した。)

vnd dienstlich sein.  
 | | ||<sup>5)</sup>  
 bhe schlusingisku boūton.

上の例が示すように、ドイツ語からのプロシア語への翻訳は、単にドイツ語の表面的な模倣であるだけでなく、本質的な模倣、すなわち、プロシア語への翻訳が語彙のみならず（統語論的形式、とりわけ語順を含めて）文法的にもドイツ語を模倣するものである。しかしこれに対する例外もある。以下、いくつかのケースについて 2, 3 の例を挙げておく。

「逐語訳」に反する統語論レベルでの「逸脱」として、よく知られているのは、バルト語に固有のいわゆる「格の用法」である：

属格：

ド 102, 10 - 11 die nicht habe einen Flecken / oder  
 ブ 103, 12 - 13 quai nitturil̄ai ainontin m̄ilinan adder

11 Runtzel / oder des etwas /  
 senskrep̄p̄usan 13 adder steison deicktas

ド 110, 15 - 16 — Auch Jn vmb Gnade vnd Gabe  
 ブ 111, 15 - 17 bhe 16 dei (gi) tennan — etnistis bhe Daiāi

5) 参考までに、筆者がテキストの標準化のために Trautmann, 1910に基づいて作成した、文法情報付きテキストの該当部分を掲載しておく：35/9 MES (Pron1 *wir*) TURRIMAI (1PIInd *haben, sollen*) DEIWAN (MAccSg *Gott*) STAN (defArticle AccSgM) RIKIJAN (MAccSg *Herr*) KIRSCHA (Prep *über alle Dinge*) 10 WISSAN (AdjPron Acc Sg? *all*) POWIJSTIN (?AccSg *Ding*) BIATWEI (Inf *fürchten*) BHE (*und*) MILLJT (Inf *lieben*) KAI (*dass, damit*) MES (Pron1 *wir*) tenneison (Pron3 GenSgM) 11 PAGGAN (Prep *um...willen*) nōusmu (AdjPron DatSgM *unser*) TAWISCHAN (MAccSg *Nächster*) NI (*nicht*) SEN (Prep *mit*) wingriskan (FInstrSg *List*) 12 NO (Prep *nach*) TENNEISON (Pron3 GenSgM) weldisan (FAccSg *Erbe*) ADDER (*oder*) BUTTAN (NAccSg *Haus*) stall̄emai (1PIConj *stehn*) BHE (*und*) 13 SEN (Prep *mit*) ainesmu (indefArticle DatSgF) swāigstan (FInstrSg *Schein*) st̄eisei (defArticle GenSgF) tickr̄omiskan (FAccSg *das Recht*) EN (Prep *an*) MANS (Pron1 AccPI *uns*) 14 pidimai (1PLConj (*dass*) *wir bringen*) SCHLAIITS (Conj *sondern*) STESMU (Pron3 DatSgM) STANSUBBAN (Pron AccSgN *derselbe, solcher*) SUBBAN (Pron AccSgN *selbst, eigen*) PREI (Prep *zu*) polaik̄ut (Inf *behalten*) 15 brewingi (Adv *förderlich*) BHE (*und*) schlusingisku (Adv *dienstlich*) boūton (Inf *sein*)

16 der Tauff bitten sollen /  
stesses 17 Crixtisnas madlit turrimai

フ 112, 3 - 4 vnd wehret jnen nicht / den solcher ist  
ブ 113, 3 - 4 bhe nidraudieite steison / 4 — beggi stēimans ast

das Reich 4 Gottes /  
stas Riki Deiwas /

具格:

フ 78, 18 Dein heyliger Engel sey mit mir /  
ブ 79, 19 twais swints Engels bāusei sen māim

フ 80, 16 - 17 Dein Heiliger 17 Engel sey mit mir /  
ブ 81, 19 Twais Swints Engels bāusei sen maim /

フ 106, 15 - 16 Jch N. neme dich N. mir zu einem Ehelichen  
ブ 107, 15 As N. imma tin N. māim prei ainan —

16 Gemahel /  
Salubin

フ 104, 13 - 15 Jm schweiß deines Angesichts soltu  
ブ 105, 14 - 17 En prakāisnan twaise prosnan turri tu

14 dein Brot Essen / biß das du wider zur Erden  
twaiian geitin 15 istwe / stu ilgimi kai tu etkumps prei semman

15 werdest / dauon du genommen bist / Denn du bist  
16 postāsei / esse kawīdsmu tou animts assai / beggi tou 17 asse

Erde /  
semmē



位 格：<sup>6)</sup>

ド 124, 3 - 5 N. habet angenehmen / vnd 4 vertretet — jn /

ブ 125, 3 - 5 N. — enimmans 4 bhe stallēti pērdin

in dieser oeffentlichen Christlichen 5 handlung /  
en schisman 5 ackewijstin krixtianiskan astin

語順についても、テキスト中に原文からの逸脱の例が見つかる。典型的なケースとして、否定詞 ni-の文中での位置の転換を挙げる（この例は数多く存在するが、必ずしも一貫しておらず、また、ドイツ語原文の文構造にも左右される<sup>7)</sup>）：

du solt nicht...

|| ×

tou ni - turri

ただし、例えば：

nicht mit ... trachten

| | |

35, 11 - 12 ni sen ... stallēmai

参照：Maziulis, 1981, 115 によるリトアニア語訳 su...negričiamės.

「逐語訳」からのこういった「逸脱」は、一方では「真正の」プロシア語の文法への接近の証拠ではあろうが、<sup>8)</sup> 推定される翻訳者側の「規範」に照らせば、量的にも質的にも散発的（スポラディック）なものであると言わねばならない。とりわけ極端な「逐語訳」の原則が支配的であったと考えられるふしがあるが、これについては後述する。

「逐語訳」の原理からの散発的な統語論的逸脱のほかに、「逐語訳性」か

6) Trautmann, 1910, 421を参照。Топоров, 1961, 283, および注55は次のように述べている：「プロシア語には一般的に言って、位格は存在しない」、「もし、エンキリディオンのひとつの位格の例：...を認めないならば。なお、この例は他の言語で（形式の点で）対応するものを持たないので、なんら実証性がない。」Schmalstieg, 1976, 148をも参照。

7) プロシア語の翻訳テキストをリトアニア語のそれと対比してみても、プロシア語の翻訳における語順がドイツ語原文の語順を忠実に模倣したものであることが分かる。井上, 1981, 86 - 88では、3種のプロシア語カテキズムのいわゆる「平行テキスト」を、Ford, 1969出版のヴェンタス訳古リトアニア語エンキリディオンにおける対応箇所と対比検討した。

8) この点については、井上, 1980 - 81, 1981, 1982 - 84をも参照。

らの後退を示す一連の例がある。ここでとりあげるのは、オリジナルと翻訳とを平行テキストとして並べて観察すれば容易にみつけることのできる、単語レベルもしくは文レベルでの「削除」と「追加」の例である。以下、顕著なくつかの例を挙げる。

オリジナルのテキストから翻訳に向けての逸脱としてみると、次の二つの方向で逸脱がみられる：

1) 「削除」：ドイツ語オリジナルの何らかの箇所がプロシア語テキストにおいて翻訳されていない例：

ド 26, 5 - 6 Jch bin der Herr dein Gott / du 6 solt nicht andere  
ブ 27, 6 - 7 — — — — — — — Tou niturri kittans

Goetter neben mir haben.  
Deiwans pagar 7 mien turrîtwei.

ド 26, 11 - 12 Du solt den Namen des Herren deines 12 Gottes  
ブ 27, 13 - 14 Tou turri stan Emnan — — twaisei Deiwas

nicht vergeblich fueren.  
14 ni enbândan westwei.

2) 「追加」：プロシア語の翻訳中に、ドイツ語オリジナルに対応していないとみなされる箇所のある例（これらは、翻訳者によって意識的あるいは無意識的にプロシア語テキストに追加された箇所であると考えられる）：

ド 26, 7 Was ist das — ? Antwort.  
ブ 27, 8 Ka ast sta billiton? Ettrais.

ド 28, 1 - 3 ...das wir bey seinem 2 Namen nicht —  
ブ 29, 1 - 4 ...kai mes sen tennëison 2 emnen / ni nideiwiskan

— — Fluchen / Schveren —  
gunnimai / ni wertemmai 3 / klantemmai / bebinnimai

Zeubern / — Liegen 3 oder — triegen  
/ waidleimai / adder 4 mēntimai — bhe paikemmai /

なお、削除と追加が混在する例もある；

ド 28, 6-7 Gedenck — — des Sabbaths — —  
ブ 29, 8-9 — Tou turri stan — Lānkinan Deinan

das du jhn 7 heyligest.  
9 — — — Swintint.

最初のグループ（「削除」）の例に関しては、おそらく、その大多数が翻訳者の見落としか、翻訳できないがための省略であるとみなすことができる。（ただし、いずれの例がどのケースでの「削除」であるかを判定することは難しい。）場合によっては、原文の一文が全面的に翻訳されていない箇所もあり、この種の大幅な削除は、翻訳の段階での欠落の可能性とともに、印刷・出版の段階で生じた欠落である可能性もある。（この点については、印刷段階での体裁の問題について言及した以下の論述をも参照のこと。）

第2のグループ（「追加」）の例の発生については、さまざまな理由が考えられようが、そのうちのいくつかについては、現代の翻訳で言う「意識」の結果も含まれよう。

逐語訳からの「逸脱」を示すこういった例が少なからず散見されるものの、「逐語訳」の原則の遵守は（通常の翻訳に比して）極めて一貫して組織的であるので、ここでも、翻訳者が翻訳の当初から特別な意図を持つこと無くこの傾向を保持したとは考えがたい。

そこで、A. ヴィルが翻訳にとりかかる当初から、そういった特別に意識した意図を持っていたと仮定して、その意図が、他のバルト諸語へのカテキズムの翻訳の場合とは異なって、どのようなものであったかを、想定してみる。

2. 総じて言えることであるが、バルト諸語へのカテキズムの翻訳がもつ目的は、現代における翻訳と同様に、外国語（ラテン語、ドイツ語もしくはポーランド語）の知識を持たない聖職者あるいは一般人に、自らの言語、すなわちリトアニア語なりラトヴィア語なりプロシア語で、カテキズムの内容を理解させることにあった。したがって、ドイツ語カテキズムのプロシア語への翻訳もまた、他のバルト諸語への翻訳の場合と同じ目的で行われたと考えることは自然である。しかしながら、プロシア語へのカテキズムの翻訳のテクニックを検討し、また、エンキリディオンの最終的な出版の形態を他のバルト諸語への翻訳テキストと比較することによって推測してみると、プロシア語への翻訳者には特別な意図があったように思われる根拠があり、次のような想定をしてみてもどうであろうかと考える。すなわち、A. ヴィルは、ドイツ語からプロシア語へのカテキズムの翻訳を、何か特別な目的を意図して行ったのではないか。<sup>9)</sup>

プロシア語エンキリディオンの翻訳者の独自の意図のもとに翻訳された結果ではないかと考える根拠は、2つある。第1の根拠は、いわゆる「逐語訳」の事実を通常の意味においてではなく、エンキリディオンの固有の意味で解釈すること、すなわち、「逐語訳」を、意識的で積極的な翻訳テクニックとして、あるいは純粋に自動的な翻訳として解釈することである。第2の根拠は、他のバルト諸語へのカテキズムの翻訳のそれとの比較で、印刷出版されたエンキリディオンの最終的な外観の特徴に注目することである。以下、この2つの、おそらく異論のある問題の論証を試みる。

2. 1. 現在もなお、「逐語訳」という用語は専門家の間で、明らかに、否定的、すなわち「逐語訳＝奴隷的翻訳」というニュアンスとともに用いら

9) 通常の翻訳は、一方では原文の言語に対して「二次的言語」でありつつ、他方ではいわば「独立した言語」であり、言語表現上の可能性に関しては、ほぼ、原文の言語に対等である。言い換えれば、そういった「独立の言語」に翻訳されたテキストは、原文を考慮することなく理解可能でなければならない。エンキリディオンのプロシア語訳テキストを評価する場合にも、この点を考慮する必要があると考える。

れている。われわれのケースで言えばこれは、プロシア語訳エンキリディオ  
ンにおいては「真正の」プロシア語の言語現象が実際には反映されていない、  
という非難になる。この欠陥は、現代の言語学者の観点からの評価であるが、  
いずれにしてもこの批判が妥当であるのは、A. ヴィルが、現代の言語学者  
が彼に期待するとおりの目的を当初から追求したか、あるいは、当初の目論  
見に反して結果的に目的を達成できなかったような場合である。

ここではまったく逆のケースを想定して、むしろ、次のような疑問を提出  
してみたい。すなわち、A. ヴィルはエンキリディオンの最終ヴァリエント  
において、自身の当初の目的を達成したのかどうか、彼は当初の目論見を実  
現することに成功したのかどうか。たしかに、この点に関して、彼を翻訳に  
とりかからせた動機（モチーフ）を推測することは今や困難である。彼が翻  
訳の当初からやむを得ずそのように翻訳作業を遂行することに決めたのかど  
うかは、今や知る由もないが、少なくとも、いったん翻訳の方針を決定して  
からは、彼は翻訳の最後の一行に至るまで、一貫してその方針を保持した。  
現存のテキストから判断するに、その翻訳方針に変更の跡は認められず、翻  
訳方針の一貫性が終始厳格に守られたことからすれば、A. ヴィルは方針変  
更の必要性を感じなかったことになる。<sup>10)</sup>

最終的に、A. ヴィルが P. メゴットの協力を得て完成させた翻訳は、  
通常の翻訳が追求する目的の実現に反するものであった。すなわち、彼は、  
翻訳がオリジナルから多かれ少なかれ独立したものになるような完成度に到  
達することを、本来、目指さなかった。むしろ彼は、プロシア語そのもので  
はなく、プロシア語の語彙を用いることによって、ドイツ語テキストの忠実  
な「再現」を行うことに努めた。つとまるところ、エンキリディオンのプロ  
シア語訳においては、ドイツ語の語彙をプロシア語の語彙に「転換」するこ

---

10) A. ヴィルはその手紙の中で翻訳の作業上の困難について触れている。Schmalstieg, 1974, 7; Maziulis, 1981, 244. しかしそれは、翻訳の方法に関するものと言うより、作業の遅延を訴えるものであろう。

とが最重要課題であり、語順を含む文法構造は「翻訳」されることなく、単に、プロシア語の語彙を用いてドイツ語の統語法をベースにして再現されたに過ぎない。

この点に関して、筆者はさらに次のように述べたい。プロシア語エンキリディオンは、結果的には、もはや「翻訳」ではなく、プロシア語の語彙を用いたドイツ語原文の「再現」である。このような視点から捉えると、伝統的に否定的ニュアンスをもって「逐語訳的」とするエンキリディオンの評価は正当ではなく、むしろ、プロシア語におけるドイツ語の忠実な「再現」という意味での積極的な「逐語訳」として評価することが必要である。

この考え方の正当性をさらに説得するために、仮説のための第2の論点について、以下に述べる。

2. 2. 第2の論点は、エンキリディオンの外見上の体裁、より正確には、V. マジュリスの出版物（1966年刊）において見ることのできるオリジナルテキストの外観に関わるものである。そこでは、タイトルページと序文を除いて、全ページにわたってプロシア語訳がオリジナルと平行するように印刷されている。つまり、両テキストの各々の段落の空間的な対応が厳密に守られている。<sup>11)</sup>

プロシア語エンキリディオンのファクシミリ版では、左ページにはドイツ語のオリジナルテキストが印刷され、右ページにはそのプロシア語訳が、左ページのドイツ語オリジナルと位置的に厳密に対応して、印刷されている。左ページのオリジナルの行数と右ページの翻訳の行数とが一致しない場合でも、印刷工は各段落の最初が両ページにおいて正確に一致するように揃えて

11) 筆者がファクシミリ出版によって見ることが出来る限りでは、同時代の他のバルト諸語へのカテキズム翻訳の中に、同様の形式で作成された翻訳テキストは見あたらない。例えば、リトアニア語訳カテキズム：マジュヴィダス訳（1547年）、同、ヴィレンタス訳（エンキリディオン）（1579年）、同：ダウクシャ訳（1595年）、ラトヴィア語訳：（カトリック）カテキズム（1585年）、同、ルターカテキズム（エンキリディオン）（1586年）。ただし、後の時代には、プロシア語訳エンキリディオンと同様の形式で印刷されたカテキズムがある：リトアニア語訳カテキズム：リシウス訳（1719年）。

いる。そのため、プロシア語を読む者は、オリジナルと翻訳との対応する位置を容易に見つけることができる。これは、極めて高いレベルの技術であると言えるし、今日でも、このように訳文を配置することはかなり面倒なことである。いったい、いかなる目的で出版者はこのような整然とした形で翻訳を印刷することにしたのか、理解に苦しむところである。当時、印刷術はまだ未発達段階にあり、大きな労力を要したはずである。また、通常はテキストの装飾にとりわけ注意が払われたであろうから、こういった手間のかかる操作をするには、何か別の理由があったはずである。

以上のことから、次のような推測をすることが可能ではなからうか。すなわち、出版者、ならびに翻訳の「指揮官」である A. ヴィルは、互いの了解のもとでドイツ語とプロシア語のテキストを、そのような独自の形態で出版することに決めた。さらに言えば、状況から推して、現在われわれが見るような形態でプロシア語エンキリディオンのテキストを対訳にして出版することに決めたのは A. ヴィル自身であった。それはとりわけ、読み易くするため、すなわち、読者がつねにプロシア語テキストとドイツ語オリジナルとを対比することができるようにするためであった。<sup>12)</sup>

こういった、翻訳とオリジナルとを対訳で出版する形態は、現代においても、古典語（ラテン語、古典ギリシア語など）のテキストを現代語訳との対訳で出版する場合に存続している。その目的は、現代のわれわれには明白である。そこで、当然、次のような疑問が生じる：プロシア語エンキリディオンの出版目的も、現代の同様の出版物の目的と同一のものではなかったか？

3. 以上に述べたことはすべて、A. ヴィルが翻訳に際して何を意図したかについての仮説の根拠となるものである。これによって、エンキリディオンの翻訳の意義に対して、いくぶんかの新たな視点を与えることができようが、

---

12) すでにエンキリディオンのタイトルページにこれを明記する記述がある：“Teutsch vnd Preussisch. Gedruckt zu...”

ここではさらに、上述のような推定のための直接の論拠に加えて、補足的論拠を与えておく。それは、一見すると、当面の問題とはなんら関わりがないかのようなのであるが、本質的には、A. ヴィルの翻訳のテクニックを特徴づけるための論拠となり得るものである。ここでとりあげるのは、古代中国語のテキストを日本語に翻訳するための特別な、自動翻訳の技法である。この技法は「訓読」と呼ばれ、文字どおりには「中国語のテキストを日本語で逐語的に読む」ことを意味する。

この伝統的な翻訳方法は、いまから千年以上も前に考案された。現在もお、中国語の文法や発音の知識無しに中国語のテキストを読むための、「便利な」方法として用いられている。この「訓読」はどこか、A. ヴィルの翻訳テクニックを彷彿させる。上記でわれわれが想定したところでは、A. ヴィルは語彙の翻訳をただで、文法に関してはドイツ語のオリジナルを単に模倣したに過ぎないということであった。そしてこのことは、語順の転換を示す一定の補助記号が使用されるだけで、文法（統語論）の意識的な模倣をめざす「訓読」の技法に、似かよっている。

エンキリディオンの翻訳テクニックと日本語の「訓読」のテクニックとの対比は、われわれの仮説にとっては、わずかに傍証になるにすぎない。なぜなら、中国語と日本語の関係とドイツ語とプロシア語の関係の間の距離は、あまりにも大きいからである。日本語は、一方では、中国語との間に系統的親縁関係を持たないが、他方では、密接かつ永きにわたる影響を中国語から受けてきた。このことは、多くの中国語からの借用語が日本語に存在することに現れている。また、多くの日本語の単語が中国語と似通った発音で読まれることさえある（この読み方を「音読」、すなわち「日本語の単語を中国語風に発音すること」という）。これに対して「訓読」は、中国語の漢字を用いるものの、すでに単語としては日本語として発音して読まれる翻訳技法を名付けるものである。

さらに言えば、「訓読」によって読まれる中国語のテキストは、日本人に



とってはほとんど日本語として感じられる。(ただし、話し言葉ではなく、書き言葉である。)そして「訓読」の翻訳規則を知っておれば、中国語の文法構造を容易に分別することができるので、中国語の原文の構造を「再現」することさえできる。通常の翻訳であれば、そのような正確な「再現」は不可能である。この意味で、「訓読」は「仮想的」翻訳であり、また、「訓読」の文法は「半日本語(半中国語)<sup>13)</sup>」の「橋渡し」文法であると理解してよい。

以上のような、エンキリディオンの翻訳と「訓読」の技法との対比を、われわれの仮説にとっての直接の論拠とみなすつもりはない。しかし、前述の2つの論拠とこの「傍証」とに基づいて、プロシア語エンキリディオンの翻訳言語についての仮説を提出することがわれわれの試みである。

4. 以上から結論を次のようにまとめることができよう。

4. 1. 「逐語訳」としてのエンキリディオンの翻訳の特徴を、翻訳者の積極的な「意図」の現れであるとみなす。A. ヴィルは、エンキリディオンを「独立した」プロシア語訳として提出することを目的とはしていなかった。むしろ彼は、一種の中間的な翻訳ヴァリエントを提出したのであり、それは、読者をしてオリジナルテキストを理解し易くするためのものであった。翻訳テキスト中には、プロシア語の語彙が上からかぶせられたかのようなドイツ語の構文の模倣の傾向が明らかに認められ、ごく一部において、プロシア語の構造が反映する箇所が散見されるのみである。そういった箇所は、A. ヴィルと P. メゴットの間が生じた、翻訳戦略に関する不協和音とも解釈できる。しかし、翻訳作業において主導権を握っていたのは、やはり、A. ヴィルであったので、結局は、「逐語訳」への傾斜が支配的であった。

---

13) 「訓読」の技法で「翻訳」された文章には、「漢文」、すなわち「中国文」という特別な名称がある。これは、「日本文」を意味する「和文」に対する名称である。この意味で比喩的に、「訓読」を「半日本語(半中国語)」と名づける。

4. 2. プロシア語の翻訳テキストをドイツ語オリジナルと「対訳」にする最終的な印刷形態もまた、A. ヴィルの意図そのものであった。言い換えると、エンキリディオン翻訳の特異性が、まさにこの印刷形態を要求したのである。

4. 3. 翻訳テクニックと印刷形態から判断するに、A. ヴィルが意図したのは、プロシア人がドイツ語を通じてカテキズムの内容を理解することであり、翻訳は、オリジナルを読むための手段に過ぎなかった。

4. 4. したがって、エンキリディオンの翻訳言語は、「中間的な」、「半プロシア語」によるヴァリエントであると見なすことができる。この状況は、偶然にも、中国語テキストの日本語訳の技法である「訓読」を想起させるものである。

以上のような仮説は大胆かつ粗雑なものであろうが、それが意図するところは、プロシア語に関する信頼するに足る情報の不足の故に、時として低く評価されるくらいのあるプロシア語エンキリディオンの言語に対して、より妥当なアプローチを探求することにある。本稿で述べられた観点は、部分的にせよ、プロシア語研究における補足的な指標を提供するものとする。

## ЛИТЕРАТУРА

Dini (1993): P. U. Dini (parengē), *H. J. Lysius Mažasis katechizmas*. 1993 Vinius.

*ENCHIRIDIONS Mārtiņa Lutera Mazais Katķisms no vācu valodas tulkots. Ķensbergā 1586*. 1924 Rīgā.

井上 (1980-81): 井上幸和, 「古プロシア語 Katechismus (I, II, III) の平行テキストにみえる, 統辞論的・文体論的異同について, 1-2」神戸外大論叢 31-3 (1980), 31-5 (1981).

- - - (1981): 井上幸和, 「Vilentas 訳リトアニア語 Enchiridion との対比による, 古プロシア語「平行テキスト」の再検討」神戸外大論叢32-2 (1981).

- - - (1982-84): 井上幸和, 「古プロシア語におけるバルト語的『格』の用法について, 1-3」神戸外大論叢 33-2, 34-4, 35-4 (1982-84).

Иноуэ (1992): Т. Иноуэ, *Нормализация прусского языка Энхиридиона. Словарь, Текст, Грамматика. Том 1: Нормализация словаря.* Институт иностранных языков г. Кобэ, *Серия монографии*, 22, Кобэ 1992.

Mažiulis (1966): (V. Mažiulis, parengė,) *Prūsų kalbos paminklai.* 1996 Vilnius.

- - - (1981): V. Mažiulis, *Prūsų kalbos paminklai, II.* 1981 Vilnius.

Panzer (1993): B. Panzer (Hrsg.), *Der Kleine Catechismus D. M. Lutheri.* 1993 Frankfurt am Main.

Топоров (1961): В. Н. Топоров, *Локатив в славянских языках.* 1961 Москва.

Trautmann (1910): R. Trautmann, *Die altpreussischen Sprachdenkmäler.* 1910 (1970) Göttingen.

Ford (1969): G. B. Ford, Jr., *The Old Lithuanian Catechism of Baltramiejus Vilentas (1579). A Phonological Morphological and Syntactical Investigation.* 1969 The Hague/Paris.

Schmalstieg (1974): W. R. Schmalstieg, *An Old Prussian Grammar. The Phonology and Morphology of the Three Catechisms.* 1974 University Park & London.

- - - (1976): W. R. Schmalstieg, *Studies in Old Prussian. A Critical Review of the Relevant Literature in the Field since 1945.* 1976 University Park & London.

Endzelin (1944): J. Endzelin, *Altpreussische Grammatik.* 1944 Riga.